

片山由美子 選

小川 軽舟 選

西村 和子 選

井上 康明 選

毎 日 俳 壇

隙間風（きまかぜ）身体（からだ）の芯（こ）を通り抜け

春日市 大野 剛繁

△評▽もちろん、隙間風が体を通り抜けることはないが、骨にまでしみてくるような冷たさこわびしさを伝える表現となっている。

数（かず）へ日（ひ）といふ忙（いそ）しさをいとほしむ

西宮市 平田 あい

△評▽年末の残り数日の忙しさ。それも苦にならないのは、正月がやってくる楽しみがあるから。

枯（かわ）蔵（くら）にさざ波（なみ）寄（よ）するばかりなり

大阪市 隠樹（いんじゆ）ノリエ

去年（こぞ）今年（ことし）時間（じかん）が落ちる砂（すな）時計（けい）

奈良市 奥田 誠

百合（よつぱ）囀（ささや）てふ花（はな）びらが水（みづ）の上（うへ）

町田市 枝澤 聖文

冬（ふゆ）晴（は）れや山（やま）の向（む）かうの日本（にっぽん）海（かい）

高松市 島田 章平

おどろ場（ば）の小（こ）さき窓（まど）より寒（ふ）の月（つき）

富士宮市 矢野 悦子

凍（こ）蝶（てつ）の飛（と）ばんとしは裏（うら）返（かへ）り

鹿児島市 平川 玲子

夜（よ）半（はん）の冬（ふゆ）ホッ（ほ）トコ（こ）アの湯（ゆ）気（き）甘（あま）し

大洲市 坂本 梨帆

カーテン（かーてん）の襷（たすき）の日（ひ）だまり冬（ふゆ）の蠅（は）

小田原市 林 梢

海峡（かいかい）に船（ふね）は一（いち）列（れつ）初（はつ）西（せい）

明石市 島谷喜代孝

△評▽狭い海峡に設けられた航路を守って進む船はおのずから列をなす。空も海もあかね色に染まって荘厳な眺めになった。

山間（さんかん）の放（は）射（しゃ）冷（れい）却（かく）冬（ふゆ）菜（さい）畑（ばた）

松本市 伊藤 和夫

△評▽放射冷却という専門用語を生かした。霜の降りた冬菜が甘みを増しておいしそうだ。

文芸（ぶんぎ）にあこがれしまま枯（かわ）すすぎ

我孫子市 中山 京子

山（やま）眠（ね）る村（むら）落（お）眠（ね）る猫（ねこ）眠（ね）る

浜松市 久野 茂樹

聖（せい）夜（や）の灯（あかり）ともし離（はな）陸（りく）機（き）着（ちゃく）陸（りく）機（き）

岸和田市 妙中 正

機（き）窓（まど）より冬（ふゆ）将（しょう）軍（ぐん）に謁（えつ）見（み）す

前橋市 西村 晃

酌（しやく）交（かう）はす客（きやく）と亭（てい）主（しゆ）や枯（かわ）木（き）宿（しゆく）

大津市 星野 暁

木（き）枯（かわ）らしや灯（あかり）のある家（いへ）に人（ひと）の声（こゑ）

西宮市 貴 春日

角（かく）打（うち）の熱（あつ）燭（しやく）うまき直（ち）帰（かへ）かな

四條畷市 中尾 謙三

非（ひ）正（せい）規（き）の社（しゃ）員（いん）がひとり枯（かわ）木（き）星（せい）

奈良市 浦城 亮祐

振（ふ）れば身（み）のどこかが締（し）まる鐵（てつ）始（はじ）

加古川市 中村 立身

△評▽今年初めて振るくわだからこそ、身体が引き締まる気がする。実は心が締まるのだらう。祈りと決意をこめて振るうから。

切れ切れの女（おんな）の時（とき）間（かん）毛（け）糸（いと）編（ひ）む

東京 福島 照子

△評▽家事や子どもの世話で、主婦はじっと座っていることがない。隙間（きま）時間（じかん）も無駄（むだ）にしない。

わからねど手（て）相（あ）見（み）せ合（あ）ふ日（ひ）向（む）ほこ

岸和田市 妙中 正

山（やま）眠（ね）るメ（メ）タ（タ）セ（セ）コ（コ）イ（イ）ア（ア）は矢（や）矢（や）りけり

西条市 薦田 明

冬（ふゆ）桜（おう）悲（かな）しいときも笑（わら）ふ癖（くせ）

川越市 益子さとし

海（うみ）鳴（な）を高（たか）め寒（ふ）夜（や）の更（さら）けにけり

千葉市 高橋 信子

寒（ふ）がりて忙（いそ）しがりて日（ひ）向（む）ほこ

津山市 森下 弘

推（お）敵（てき）の足（あし）這（は）ひ上（あ）がる寒（ふ）さかな

浜松市 久野 茂樹

百（もも）合（が）囀（ささや）コン（コン）ビ（ビ）ナートは蒸（む）気（き）噴（ふ）き

四日市市 鈴木 宗嗣

足（あし）もこに寒（ふ）さ絡（か）まる橋（はし）の上（うへ）

川口市 高橋さた子

半島（はんとう）は風（かぜ）の踊（おど）り場（ば）寒（ふ）に入（い）る

東久留米市 矢作 輝

△評▽房総半島だらうか、踊り場という例えは、風が自由自在に吹きつづけることを思わせる。スケールの大きな寒の入りである。

未完（むくわん）の句（く）古（こ）に転（てん）がす冬（ふゆ）至（し）風（ふう）呂（りょ）

加古川市 伏見 昌子

△評▽文芸を楽しむ心情が弾む。まだ完成しない句を推敲しながらユズの浮かぶ冬（ふゆ）至（し）風（ふう）呂（りょ）に入る。

山間（さんかん）を寒（ふ）暮（ぼ）の青（あお）き雲（くも）つぐく

甲府市 清水 輝子

数（かず）本（ぽん）の枯（かわ）木（き）が山（やま）に屹（えき）立（た）す

鴨川市 西宮 鉄雄

鳥（とり）渡（わ）る高（たか）層（そう）ビル（ビル）は灯（あかり）の臺（たい）標（ひょう）

富士市 後藤 秋臣

カ（カ）ト（ト）レ（レ）ア（ア）や物（もの）故（こ）者（じゃ）欄（らん）に同（どう）期（き）の名（な）

志木市 谷村 康志

機（き）長（なが）より二（に）万（まん）メ（メ）ー（ー）トル（トル）にて御（ご）慶（けい）

奈良市 梅本 幸子

狛（こま）犬（いぬ）の鼻（はな）先（さき）に海（かい）年（とし）の暮（くれ）

周南市 九内 千沙

山（やま）晴（は）れて屋（や）根（ね）にくまなく千（ち）蒲（ふ）団（だん）

仙台市 引地 恵一

木（き）枯（かわ）を封（ふう）じ込（こ）めたりド（ド）ア（ア）一枚（まい）

高知 渡辺 哲也

体と心を取り戻す

染野 太朗

うたは奏でる

年末年始、埼玉に帰省した。東京で学生時代の友人とひさしぶりに会ったり、ずっと行きたかったカフェやアトリエを巡ったりもした。一方で、何の予定もない暇な時間も多かった。暇だといふスマホを開いてしまふ。開いては閉じ、閉じては開き、ハッと気づくと長い時間がたっている。同じ姿勢で体を硬くして、視覚だけを使い、心を丸ごと画面の向こうに固定している。今ここで呼吸しているはずの自分の体を忘れていた。体と心をここに取り戻さなければ、と思う。

淹（ひた）れてもらったお茶温（ぬる）かくくたりゆく内側（うちがわ）という常（じょう）なる彼（かれ）方（かた） 山下（やまの）泉（いづみ）

温（ぬる）かいお茶（ちや）が喉（のど）をくだっていくのを感じている。いれてもらったことへの感謝（かんしゃ）やうれしさもしみじみと感じている。さらに、お茶が体の深くへとくたさる感覚（かんかく）を延長（えんじやう）するようにして、自分の心の深淵（しんえん）をものぞき込んでいく。自分の体のことも心のことも、究極（きうごく）のところよくわからない。しかしこの歌からは、体をおして心を見つめ、同時に心をおして体を見つめるというような、体と心のゆたかなかわりが感じられる。

・「コナナ」の愚（おろ）子（こ）に買（か）ひしラン（らん）ボリン（ボリン） 愚（おろ）子（こ）を思（おも）ひ三分（さんぶん）跳（は）べり 大口（おほぐち）玲（れい）子（こ）

とてもユーモラスだが、体と心に関するすぐれた示唆（しそ）を与（あた）えてくれる歌でもあると思う。ランボリンで跳ぶときの体の感覚によって、同じ感覚を得ていたであろう愚（おろ）子（こ）を感じ取（と）っている。思うだけでは得られない、体を經由（きよ）するからこそその確かさがある。その確かさが作者の心を明るく励（も）ましめているのかも知れない。

（そのの・たろう＝歌人）